

織豊期から江戸時代初期の庭園

1 はじめに

遺跡整備研究室では、庭園に関する調査研究の一環として2001年度より「庭園の歴史に関する研究会」を実施している。総合芸術たる庭園とその周辺文化について、庭園史・造園学のみならず、考古学、建築史、美術史、歴史など、多様な観点から議論を深め、庭園に関する研究の進展を図ることを趣旨としている。

これまでは古墳時代から中世までの庭園を研究対象としてきたが、今年度より5年にわたる第4期中期計画(2016~2020年度)の中で、近世の庭園をテーマとする。

2 先行研究と研究会の位置付け

近世の庭園研究史上、画期をなす3冊の本を取り上げることができよう。まずは龍居松之助の『近世の庭園』¹⁾。1942年発刊で、初めて近世に特化した造園書であった。そこでの「近世」というのは江戸時代を指しているが、その間に庭園の文化は「著しき発達を遂げた」ことを龍居が指摘している。その発達を支えた原因は何と言っても「無事太平の世」、約200年間の政治的かつ経済的な安定であった。その間に庭園の数が増えただけでなく、「考古趣味」、「収集趣味」、「文芸趣味」など様式も自由に発展し、施工上の技術も大きく進歩したという。

研究者であり、造園家でもあった龍居にとって近世は「現代造園と最も密接なる関係を有する」時代であり、その間に発展した技術や様式などは、明治・大正・昭和初期の庭園の研究者、造園家、植木職人にまで大きな影響を与えたと強調している。というのも、それまでの日本庭園史研究は中世に執着する傾向があり、近世については江戸時代初期の宮廷と大名の庭園を頂点として、芸術的な価値が低く、墮落していたと考えられていたのである。

次に、特筆に値するのは白幡洋三郎の『大名庭園 江戸の饗宴』である²⁾。1997年に発刊されたこの本は、これまでの重森三玲と森蘊に代表される視覚優位の日本庭園史研究の常識を覆すような内容であった。白幡は視覚だけではなく、饗宴や社交の場として、つまり庭園の使

い方を考慮に入れない限り、江戸の大名庭園の歴史的な価値を理解することができないという結論に至った。

こうして『近世の庭園』と『大名庭園 江戸の饗宴』は絵図や文献資料の分析と、現存する歴史的な庭園の調査にもとづいていたが、近年の研究には発掘調査の成果も反映されている。また、江戸時代の中でも江戸という大都市と、そこで造営された大名屋敷と大名庭園についての研究が増えている。つまり、近世の庭園都市の形成とその変遷を探っている傾向が見られる。

2008年に発刊された宮崎勝美の『大名屋敷と江戸遺跡』はその草分けになった³⁾。「江戸時代の遺跡はかつてはほとんど発掘調査の対象にならなかった」と宮崎が冒頭で述べているように、まだ新しいジャンルである。しかし、宮崎の目的はあくまでも大名の「屋敷」の実態を解明することにあるので考古学・文献史学・建築史的なアプローチを試みてはいるものの、庭園史や造園についてはほとんど言及していない。

それに対して、2009年に発刊された飛田範夫の『江戸の庭園一将軍から庶民まで』は江戸時代における江戸の庭園の実態をあきらかにしようとしている⁴⁾。将軍の庭園、大名の庭園、庶民の庭園と階級ごとに紹介しているだけではなく、当時の植木屋の事情まで厳密にまとめた研究書である。最終章の中で、江戸という町の拡張と現代の東京の過密化を照らしあわせながら、造園から都市計画へと考察を展開している。

以上の本を読めばわかるように、これまでの近世の庭園研究は江戸時代に集中していた。ただし、本研究においては安土桃山時代という、織田信長と豊臣秀吉が実権を握っていた時代(織豊期)から、江戸時代末期、徳川幕府の崩壊までを対象とする。あわせて約300年間におよぶ期間だが、今回の研究会はその第一回目として、織豊期から江戸時代初期にかけて作られた庭園に焦点を当てて議論を進めることにした。

3 研究会の開催

織豊期とは、戦国時代の混乱から天下統一への重要な転換期である。短期間ではあるが、下剋上という言葉でもよく表現されているように、政治的・社会的・文化的にも大きく揺れ動いた時代であった。武家による天下統一と、西洋文化との接触がその大きな特徴になるといえ

よう。とりわけ、織田信長と豊臣秀吉などと直接会見した宣教師ルイス・フロイスが残した著作『日本史』は歴史学、文化史学、比較文化学、言語学のみならず、日本庭園の歴史を考える上でも貴重な史料であり、今回の研究会でも主要な参考文献になった⁵⁾。

こうして、織豊期の庭園を知るには様々な文献資料や絵画などが残っているが、じつは現存する庭園遺構が比較的少ない。ただし、近年の発掘調査によって確認された織田信長と豊臣秀吉関連の建築と庭園遺構を対象としたことが、今回の研究会の特色であるといえよう。考古学の成果を出発点として、庭園史学、建築史学、歴史学などの観点から議論を深め、これまでの日本庭園史を再考するきっかけとなった。

「織豊期～江戸時代初期の庭園」という研究会は2016年11月27日に開催した。前半の研究発表では、5名の研究者がそれぞれの専門の見地から報告をおこなった（以下の研究者の所属は2016年11月当時のもの。敬称略）。後半はそれらをふまえて、参加者を交えて討論をした。

まず、高橋方紀（考古学、岐阜市教育委員会）の研究発表「岐阜城跡織田信長館とフロイスの記録」では、発掘調査によって発見された岐阜城（稲葉山城）の庭園跡と、ルイス・フロイスの書簡にみられる同岐阜城の庭園の記述を照らしあわせながら、史跡の現状と今後の整備の課題が紹介された。

松尾法博（考古学、佐賀県立名護屋城博物館）の研究発表「肥前名護屋城の数寄空間―特別史跡 名護屋城及び陣跡の庭園遺構―」では、近年の発掘調査であきらかになった陣跡とその整備の現状が紹介された。これまでは堀秀治陣跡にあった「数寄屋」と「能舞台」が注目をあびてきたが、今回の研究会では発見された飛石や雪隠や旗竿石（手水鉢か）などに焦点を当てて、織豊期の陣における露地の重要性について考察を深めた。

小野健吉（庭園史、和歌山大学）の研究発表「安土桃山時代庭園の位置づけと意義」では、代表的な庭園を紹介しながら、織豊期を特徴づけるものは何かと問うた。小野は大きく分けて、武将の城郭と居館の庭園、草庵の茶の湯と露地の完成、枯山水庭園の展開、そして庭園内の楼閣建築という4つのカテゴリーを区別し、織豊期は室町時代と江戸時代の重要な結節点であると結論づけた。

加藤悠希（建築史、九州大学）の研究発表「大工資料か

らみた織豊建築像」では、江戸時代初期の大工技術書『匠明』を中心に、大工と庭園とのつながりを探った。結局、取り上げられた大工の技術書や資料などに庭園関係の記述がほとんどみられなかったが、それぞれの造営組織の仕組みを見直すきっかけとなった。

河内将芳（日本史、奈良大学）の研究発表「織豊期の文化と庭園」では、文献資料をもとに、織田信長が関わった旧二条城と二条殿屋敷の庭園と、豊臣秀吉が伏見向嶋と醍醐でおこなった植樹（桜）が紹介された。それぞれの権力を表現するために、短期間のうちに多量の石を動かし、多くの樹を植えて庭園を作ったことが日本庭園史においても特異な行為であったと強調された。

総合討議では岐阜城と肥前名護屋城の発掘の成果とその整備と活用について質問が多かった。新しく発見された遺構から、露地という茶庭の歴史とその利用を再考し、また建築と庭園の関係について、表と裏、公と私の空間の使い方についても議論が展開した。

以上の研究発表と総合討議をとりまとめ、2017年3月に『平成28年度 庭園の歴史に関する研究会報告書』を発行した⁶⁾。多くの写真、図面、記録対比表などを掲載し、学際的なアプローチにより織豊期から江戸時代初期までの庭園の現在認識を紹介している。

4 今後の展開

次回からは江戸時代を研究対象とし、回遊式庭園（大名庭園と宮廷庭園）、茶の湯と茶庭、庭園文化の普及などとテーマごとに取り分けて、近世の庭園を様々な角度から考察する予定である。

（エマニュエル・マレス）

註

- 1) 龍居松之助『近世の庭園〈現代叢書〉』三笠書房、1942。
- 2) 白幡洋三郎『大名庭園 江戸の饗宴』講談社選書メチエ、1997。
- 3) 宮崎勝美『大名屋敷と江戸遺跡（日本史リブレット87）』山川出版社、2008。
- 4) 飛田範夫『江戸の庭園―将軍から庶民まで』京都大学学術出版会、2009。
- 5) ルイス・フロイス（著）柳谷武夫（訳）『日本史：キリシタン伝来のころ』平凡社、1963。
- 6) 『織豊期～江戸時代初期の庭園 平成28年度 庭園の歴史に関する研究会報告書』奈文研、2017。